

論 文 要 旨

2022年 1月 17日

学位申請者氏名

上石 景子



申 請 学 位

博 士 (地域研究)

主 論 文 題 目

古代ジャワの宮廷詩『ガトートカチャーシュラヤ・カカワイン』研究

——ラングー=「美」の観念を紐解く——

論文要旨

本論文は、12世紀後半、ジャワの宮廷詩人ムプ・パヌルによって、インドの二大叙事詩のひとつであるマハーバーラタの物語から着想を得て創作された韻文テクスト『ガトートカチャーシュラヤ・カカワイン』(Ghaṭotkacāśraya Kakawin、以下『ガトートカチャーシュラヤ』)を題材とし、その受容に着目してテクストに立ち現れる美的観念を論じたものである。

『ガトートカチャーシュラヤ』が創作される背景には、インド化されたジャワの宮廷において花開いた、詩人による文学活動がある。古代ジャワの宮廷での文学活動の成果物は、古ジャワ文学(Old Javanese Literature)と呼ばれ、そこでは、詩人が美を追求し、美に感応し、そして、美によって得られる恍惚の感覚を自らの言葉で紡いでいくという経験が重要視されていた。このような美的観念の古ジャワ文学における表現は、「ラングー」(以下、「美」)という古ジャワ語をその淵源としながら発展してきた。「美」とは、美をその意味領域の土台としながら、そこから派生する形で、恋(美しい者への思慕)や詩(美しさの表現媒体)も表し、さらに、美そのものののみでなく、美によって得られる感覚や経験をも包含する語である。「美」という観念には、美に魅せられることによって生じる感動が不可欠なのであり、その意味で「美」の受容に着目することが重要となる。

『ガトートカチャーシュラヤ』もまた「美」を主題としており、主人公の英雄アビマニユとその想い人クシティ・スンダリー姫の思慕の念を描く物語の中では、「美」によって生じる快楽と苦悩が浮き彫りにされている。つまり、『ガトートカチャーシュラヤ』における「美」の世界は、その光と闇のが織り成されることによって構築されている。本論文では、このような様相を呈する「美」について、それがいかに受容者に働きかけるのかということを考察していくために、パフォーマティヴ性、表現主体と客体、そしてメタファーに着目していく。本論文の構成は、序章、終章を含めて全5章から成る。以下では、各章の概要を説明していく。

序章においては、古ジャワ文学の成り立ちについて、ジャワを含む東南アジアのインド化現象から見ていき、そのうえで、インド化されたジャワの宮廷において文学活動が行われていた組織的な枠組みや古ジャワ文学の時代区分を概観する。そして、古ジャワ文学には、一方では、叙事詩やサンスクリットといったインドの文学の伝統をジャワが吸収していく側面と、他方で、そのようなインド由来の伝統をジャワ化していく側面があるということを述べ、その両側面は二律背反ではなく、インドの伝統のジャワでの理解が深まるほどに、その応用であるジャワ化が進んでいくことを指摘する。

第一章では、物語の設定と登場人物の相関関係、テクストが創作された時代の特徴、宮廷詩人である作者に焦点を当て、テクストの構造と成立の契機について考察する。まず、物語の設定と登場人物の相関関係を扱う一節では、『ガトートカチャーシュラヤ』の物語の構造を理解するために必要なマハーバーラタの知識ならびにマハーバーラタから『ガトートカチャーシュラヤ』へ引き継がれた登場人物たちを見ていき、テクストの概要を確認する。テクストが創作された時代の特徴を扱う二節では、序章で論じた古ジャワ文学の時代区分の中で、古韻文期に位置づけられる『ガトートカチャーシュラヤ』の時代的特徴を見ていく。古韻文期とは、インドの叙事詩に着想を得つつもジャワの独自性がテクストに現れていくジャワ化の画期となる時代であり、また、王との結びつきによって宮廷詩人の地位が確立されていく時代でもあった。このような時代背景において、『ガトートカチャーシュラヤ』もまた、王と登場人物を関連づけることによって王の威信を高めようとしているということを述べる。そして、宮廷詩人という角度からテクストを見つめる三節では、まず、作者ムプ・パヌルが『ガト-

トカチャーシュラヤ』を創作する以前に携わった 2 つのテクストとその内容を確認し、『ガトートカチャーシュラヤ』とは、ムプ・パヌルの円熟期に、それまで携わったテクストの要素を織り込みながら創作された彼の集大成であることを述べる。次に、ムプ・パヌルの「美」への信仰への姿勢についてテクストを読みながら探っていき、詩人とは「美」を追求する内面性によって詩人たりえるという詩人観および矜持が彼の中にあったことを論じる。

第二章では、『ガトートカチャーシュラヤ』の受容に焦点を絞り、テクストと受容者の相互作用によって意味が生成されていくということについて考察する。『ガトートカチャーシュラヤ』は、それまでに培われた文学的な伝統を引き継いでいる点、写本を書き写すことで継承されてきた点、語り手による朗誦を想定している点から、『ガトートカチャーシュラヤ』とは、多様な要素の錯綜する織物くテクスト>であるといえる。第二章においては、この 3 点について、それぞれの節で扱っている。一節では、『ガトートカチャーシュラヤ』に引き継がれている文学的な伝統を受容の側面から捉えなおすため、ジョナサン・カラーの「文学的能力」という概念を用い、『ガトートカチャーシュラヤ』の受容者があらかじめ了解していかなければならない知識を整理していく。二節では、『ガトートカチャーシュラヤ』が、第一に、作者が自筆本を創作し、第二に、宮廷書記がその自筆本を写本へと書き写し、時には改変を加え、第三に、文献学者が本文校訂、翻字、翻訳を行うという、3 段階を経て構築されてきたこと、したがって、さまざまな主体によって手を加えられてきたことを述べる。そして、そのような主体とは從来、『ガトートカチャーシュラヤ』を取り巻く世界観の能動的な享受者であり、その意味で『ガトートカチャーシュラヤ』は、能動的な享受と変容の産物であることが指摘される。三節では、『ガトートカチャーシュラヤ』が朗誦を前提としたテクストであり、したがって、語り手という主体もまたテクストの構成要素であることを述べる。そして、パフォーマンスであるがゆえにテクスト、語り手、聴衆を巻き込む一体感を生み出し、それが聴衆、読者問わず受容者を物語世界に没入させていくパフォーマティヴな力の源となっていることを明らかにする。

第三章は、客体としての美と、主体的な美への感応という 2 つの側面を持つ「美」の特性に着目し、表現主体と客体という視点で『ガトートカチャーシュラヤ』を見ていき、それがいかに受容者に働きかけているのかを考察する章である。一節では、テクストに立ち現れる詩人像が「美」の表現主体として機能していることを踏まえ、主人公アビマニユに投影された詩人像を見ていく。そこでは、詩人による「美」の神（靈性として認識される「美」）への信仰のあり方が示され、その神との合一によって自我を失う感覚が恍惚のみではなく、不安や恐怖をももたらすことであることを論じる。また、詩人とは、自然や女性の美しさを詩にのせる表現主体であるだけでなく、色ごのみとして宮中の女性の注目を集める客体であることも示される。「美」の客体としては、二節においてヒロインのクシティ・スンダリー姫、三節において自然の描写をそれぞれ扱う。二節では、クシティ・スンダリーによって体現される「美」は、美しさ、もの哀しさ、か弱さといったイメージを有することを論じる。そして、クシティ・スンダリーがそのようなイメージの中で語られる背景には、彼女が不可侵かつ神聖な美しさを持つ登場人物であるのにもかかわらず、恋患いに蝕まれていくことで、そこに悲哀や憔悴が生まれていることを考察する。三節では、『ガトートカチャーシュラヤ』の中で描かれる自然がテクストの受容者の五感に訴えかけながら「美」を体感させること、また、自然が登場人物の心情を代弁する景情一致の手法が見られることを論じる。最後に、表現主体と客体についてこの章で論じてきたことを踏まえ、受容者が、一方では登場人物に感情移入していき、他方では登場人物を客観的に鑑賞することで、登場人物に近づいたり離れたりする動きを繰り返すことで受容がなされていることを明らかにする。

第四章では、『ガトートカチャーシュラヤ』において受容者の脳裏に「美」の世界観が醸成されいくうえで重要な役割を果たすメタファーについて考察する。メタファーとは、まさに詩人が事物に「美」を吹き込む技法といえる。ここでは、『ガトートカチャーシュラヤ』において代表的なメタファーとして、蔓植物、檳榔子、月とカッコウ、ブダクを取り上げ、それぞれの描写を見ていきながら、どのような情調がつくられているのかを論じていく。一節では、蔓植物を扱う。蔓はその形状から、登場人物を美的経験へと導く道しるべとしての役割、そして、そこに縛りつけ、木陰をつくりだして外界から隔離する役割を果たすことで、畏のように妖しいイメージを帯びている。そして、蔓植物は登場人物が背負わされた「美」の宿命をあらわすものとしても機能し、その罪深さとも密接に繋がっている。二節では檳榔子を扱い、それが嗜好品として物語に登場し、依存をあらわすメタファーとなっていることを見ていく。それにより、一方では快楽を与える、他方では、依存から抜け出せない苦悩を与えるという、「美」の繋縛の仕組みが浮き彫りとなる。三節では、光り輝く月と、その光を求めて鳴き続けるカッコウが、慈悲深く救いを与える者と救いを懇願する者に重ねられている描写を見ていく。そして、そのように登場人物のあり様や心情を代弁する月とカッコウのそれぞれが涙を連想させ、それによって哀愁が表現されていることを示す。四節では、古ジャワ文学において詩的情緒あふれる花とされるブダクを扱う。とりわけ、そのブダクが、子どもを模した人形として扱われている描写に焦点を当てる。ブダクの人形は、子どもを模して作られていることで、本当の子どもと対照され、クシティ・スンダリーがアビマニユの世継ぎを産むことができないという結末を逆照射する。それとともに、繁殖と次世代への継承、未来に繋がっていく堅実性、真の充足感をあらわす子どもとの対比の中で、虚構としてのブダクの人形は、一時的な快楽や儂さを意味することを導く。以上の4つのメタファーを通じて、第四章では、メタファーの惹起するイメージが「美」の世界を立体的に構築していくこと、そして、その世界には光と闇という両義性があることが示される。

終章では、第四章まで論じてきた「美」の光と闇を掘り下げるため、快楽と苦悩という視点で物語全体の展開を考察していく。アビマニユとクシティ・スンダリーは、物語の中で快楽と苦悩との繰り返しに翻弄されているのだが、2人の快楽と苦悩は、まずそれが訪れることが予感があり、そのうえで実現する。そこには、内面に抱いたものが現実を引き寄せるという法則が認められる。『ガトートカチャーシュラヤ』とは、作者、登場人物、語り手、受容者が一体となって心の揺らめきを経験するテクストなのである。終章では、その心の揺らめきとは、快楽と苦悩の背後にある2つの価値観の間の往来であり、そのような逡巡や葛藤という俗なる心のあり様が『ガトートカチャーシュラヤ』を通じて描かれていることを論じる。そして、心の中の俗なるものに蓋をするのではなく、むしろ対峙していく姿勢、その経験により成熟していく方向性が示されていると結論づけている。最後に、「美」とは、手に入れようとすればするほど逃げてしまうものであり、また、主題であるにもかかわらずその全貌を完全に現さないものであるということを指摘し、新たな美的表現が創造されていくための余白を常に残すという「美」の文学的創造性に繋げている。